

國學院大學學術情報リポジトリ

『源氏物語』明石巻における明石の入道の引歌：
源信明詠の引用が果たした役割をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神原, 勇介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001455

『源氏物語』明石巻における明石の入道の引歌

―源信明詠の引用が果たした役割をめぐって―

神原 勇介

論文要旨

『源氏物語』明石巻において、光源氏と明石の君が文通を始めて以降、関係は進展せず、二人の縁談をまとめた明石の入道は思い悩む。そこで、秋の明月の晩、入道は光源氏に、源信明の「あたら夜の月と花とをおなじくはあはれ知れ覧人に見せばや」という『後撰和歌集』春部に入集する和歌の一節を贈る。それを受けた光源氏は明石の君を訪れるが、この季外れの引歌の何が光源氏を動かすに至ったのだろうか。信明の歌に詠まれる春の景物「花」は明石の君の比喻であり、さらに「あたら夜」

という表現に、離れた場所にいる恋人たちをつなぐ明月や、独り寝の夜のイメージが読み取れ、そうした引き歌の持つイメージが光源氏に働きかけたのであった。また、引歌を受けた光源氏の「すきのさまや」という反応は、光源氏自身の自省の言葉と位置付けられるが、その背景には、光源氏と明石の君、そして入道の三者による宿世と思惑の交錯があり、今後の物語展開を左右する心理劇が展開されていたのである。その膠着状態を破ったのが、入道の引歌だったのである。

はじめに

明石巻の中盤では、光源氏と明石の君が逢瀬に至るまでの顛末が語られる。初夏に文通を始めた二人であったが、その後、関係は一向に進展しないまま季節は秋を迎えてしまう。なんとしても二人の逢瀬を実現させたい明石の入道は、一計を案じ、光源氏を娘のもとへ招きよせようと画策するのであった。

忍びてよろしき日みて、母君のとかく思ひわづらふを聞きいれず、弟子どもなどにだに知らせず、心ひとつに立ちゐ、輝くばかりしつらひて、十二三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたら夜の」と聞こえたり。君はすきのさまやと思せど、御直衣奉りひきつくりひて夜更かして出でたまふ。
(二五五頁)¹

吉日を見繕い、娘の将来を案じる母親を黙殺し、弟子たちにすら知らせず自分ひとりで娘の居所を「輝くばかり」に飾り立てた入道は、「はなやか」な月光が指し始めた「十二三日」の夜に、たった一言、「あたら夜の」という言葉を光源氏に贈った。それを受け取った光源氏は、明石の君の住む岡辺の宿へと赴き、二人は遂に逢瀬を遂げるのであった。傍線部「あたら夜の」は、古注釈以来、次の歌が引歌に比定されてきた。²

月のおもしろかりける夜、花を見て 源さねあきら

あたら夜の月と花とおなじくはあはれ知れ覧人に見せばや

(『後撰集』春下 一〇三)

情趣深い月夜に花を見た詠者が、同じことならこの風雅を解する人に見せたいものだ、という感慨を詠んだ歌である(以下、当該歌と称する)。本場面の引歌は、下句が物語の文脈に響いていると見て、「あはれ知れ覧人」である光源氏に娘を見せたい、という入道の誘いの言葉と解するのが定説である。美しい月夜の本場面は、男女の逢瀬にうってつけであり、寂寥の高まる秋の雰囲気も相俟って、長く進展のなかった二人の関係に、光源氏が痺れを切らしたという読みも不自然ではなからう。³

しかし、光源氏を明石の君のもとへ駆り立てたのは、本当に単なる恋の焦燥であったのだろうか。光源氏は文通を始めた当初から、明石の君のことを「進み参らばさる方にても紛らはしてん」という程度にしか考えていなかったし(二五〇―一頁)、直前の場面でも「渡りたまはむことをばあるまじう思し」ていた(二五三頁)。即ち、明石の君が進んで奉仕してくることが大前提であり、自分から彼女のもとを訪れるのは全くの論外だったのである。光源氏のそうした態度が改まったことは、「焦燥」の他にも別の理由が想定される。また、本場面で光源氏が明石の君のもとへ出向く最終的なきっかけになったのは、明石の入道の「あたら夜の」という引歌であり、長く続いた膠着が入道によって打開されるという展開は顧みられてよかったらう。「焦燥」で片づけてしまつては、本場面の持つ意味は汲み取り切れないのではないだろうか。

このように考えていくうえで直面するのは、本場面の入道の引歌に、風流気取りの行為が批判されているとする見方と、光源氏を惹きつけた優れたものだったととらえる見解の二通りの説があり、一致を見ていない現状であろう。さらに、注意深く見れば、本場面が秋夜の情景を描いているのに対して、引用された当該歌は春の歌であり、物語の場面と歌の季節がずれた、季外れの引歌であることがわかる。和歌という文芸は本来、「折」即ち時節に合った美意識を重視するものであり、『枕草子』に「いといかがは、文字の数知らず、春は冬の歌、秋は梅、花の歌などをよむやうははべらむ」とあるように、当座の季節に合った歌を詠むことは基本中の基本だったのである。引歌とはいえ、季外れの当該歌の句が選取されたことの意味も一考を要する。そうした点も考慮したうえで、入道の引歌に妥当な評価を与えることは、本場面の持つ意味を考えるうえで不可欠であるに違いない。

本稿では、光源氏が長らく堅持していた意見を曲げ、明石の君のもとへ自ら出向いていくという本場面の展開の持つ意味を考察する。その過程で、まず光源氏を動かす切っ掛けとなった入道の「あたら夜の」という引歌を分析し、引歌に適切な評価を与えたい。そのうえで、本場面に至るまで長く続いた関係の膠着状態の持つ意味、本場面に関わる光源氏、明石の君、入道などの登場人物の心情を確認し、関係の膠着とその打開という展開を通して本場面で述べられていたことを考え直してみたい。

一、季外れの引歌の持つ意味

「あたら夜」という表現を用いた歌は、類似表現である「あたらこの夜」・「あたら今宵」を含めると平安末までで十四首あるが、「あたら夜の」という句を持つ歌は『源氏物語』までの例では当該歌のみである。故に、季外れの歌であるにもかかわらず本場面の引歌に比定されてきた。確かに当該歌は後世の歌合や歌学書に多く引用されていて評価も知名度も申し分なく、引歌の比定自体に異論はない。ただし、やはり季外れの引歌であるというのは看過すべからざる点であったように思われる。

作中には、会話文や和歌中でなされる引歌のうち、季外れのものが二十例認められるが、その引かれ方はほぼ以下の通りである。第一に、歌中の文言を文飾的に使用している事例である。たとえば、「花鳥の色をも音をもいたづらに物うかる身は過ぐすのみなり」（『後

撰集』夏二二・藤原雅正）は五回引かれているが、夏の部立の歌であるにも関わらず、秋の場面に二度引かれている（薄雲卷②四六二頁、鈴虫卷④三八四頁）。引用元の『後撰集』歌は本来、無沙汰を詫びた貫之の歌への返歌であるが、いずれの例も歌本来の主題までふまえて引いたものであるとはいえず、単に文飾的に文言が使用されたと見るべき例である。第二には、季節自体はずれていても景物が一致している事例である。総角卷には、宇治への訪れを逡巡している匂宮に対し、薫が、「初時雨布留の山里いかならし住む人さへや袖の湿づらむ」（『寛和二年内裏歌合』三二・好忠）の第二・三句を引いて背中を押す場面があり、本場面と近似した例だと言える（⑤二八六頁）。歌の部立は冬であり、場面は「九月十日」のことなので季節がずれているが、折しも「時雨めきてかきくらし」ていたというから話題の中心となる景物は一致している。他に、晩秋と初冬など、実質的な季節のズレがほとんどないものや、引歌というよりパロディに近い例などがあるが、概ね上記の分け方で問題はないように思われる。

本場面の入道の引歌は、下句「あはれ知れ覧人に見せばや」が光源氏への誘いの言葉として機能していると見る理解が一般的であり、異論はないが、そうだとすれば単なる文飾以上のものであるに違いなく、前者の例には数えられまい。また、「月」という景物が、場面と歌の双方に共通して印象的ではあるものの、春の景物たる「花」も主たる対象として詠み込まれているからには、後者の例としても処理したい。入道の季外れの引歌は、作中の他の例と比べても、特異なものだったのである。¹¹

そもそも、入道が当該歌の初句を用いて誘いの言葉としたのは何故であったか。当該歌の論理を本場面に引き移すと、入道は月の鑑賞を口実に光源氏を岡辺の宿へ誘い出していることになる。¹² 加えて、当該歌は結句の「見せばや」がやや恋の風情を帯びており、¹³ 詠まれた情景も月が美しく照り輝く本場面と相性が良い。しかし、月の鑑賞を口実に光源氏を招きよせるだけなら、なにも季外れの当該歌でなくとも他に適当な歌があったはずである。また、月を鑑賞することはわざわざ岡辺に出かけていかずとも、光源氏の起居する「浜の館」（二三四頁）でもできたのではなかったか。光源氏は初夏にも、「海の上曇りなく見えわたれる」夕月夜に都の邸の池水を想起して懐旧にひたつたことがあった（二二九頁）。つまり、どこにしようとも月をめめることは可能だったはずであるから、「あたら夜の月」のみを重視した解釈では、入道の引歌は誘いの言葉としての論理を持ちえないことになる。

むしろ、本場面では「月」の印象が強く、入道の誘いの言葉にとっても重要な景物であったには違いない。そのことは後述するとし

て、ここでは、入道の引歌が他の例と同列に扱えない原因ともいうべき、当該歌の「花」という景物の意味について考えてみたい。先行研究や諸注で顧みられることは少ないが、鈴木日出男氏は、当該歌の「花」には明石の君が「あたら」の女君だという入道の主張が込められていると説いている。¹⁴つまり、当該歌の「花」は、明石の君の比喩として本場面でも機能しているということである。

女性を花に、特に本場面のように父親が娘を花に喩える発想は先行例が認められる。

染殿後の御前に、花瓶に、桜の花を挿させ給へるを見て、よめる 前太政大臣

年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし

〔古今集〕春上 五二

この歌は『大鏡』でも「后を、花にたとへ申させたまへるにこそ」と評されている（良房伝 六六頁）。また、『源氏物語』中にも同様の発想に立脚した表現はある。たとえば、光源氏が玉鬘を藤の花に喩えて求婚者である萤宮に期待を持たせる例や（胡蝶巻③一七一頁）、紅梅大納言が娘の中の君を梅に喩えて匂宮にすすめる例（紅梅巻⑤四九頁、五三頁）、今上帝が碁の賭け物として菊を薫に贈り、暗に女二の宮を降嫁させる意向を示した例などが挙げられよう（宿木巻⑤三七九頁）。こうした例を見るに、鈴木氏の説は十分に首肯されよう。

以上のように、「あたら夜」の月が美しい晩に、「花」＝明石の君を見せたいというのが、入道が引歌に託したメッセージであったと考えられ、入道の引歌は、下句「あはれ知れ覧人に見せばや」のみならず、第二・三句「月と花とおなじくは」まで含めた非引用部分全体が、場面と緊密に響き合って誘いの言葉として機能しているということになる。また、本来春の景物たる「花」こそ、この引歌の論理上の眼目であったといえ、季外れの当該歌が誘いの言葉に選ばれたことの意味の一端は理解できよう。

二、「あたら夜」のイメージ

ただし、先にも触れたように、本場面では「月」の印象が圧倒的に強い。実際に光源氏が明石の君のもとへかけていく段になって、
も、「入江の月影」や（二五五頁）、「月入れたる真木の戸口」などの表現が散見される（二五六頁）。したがって、「花」＝明石の君の

比喩と同様、「月」も重要な要素であつたこともまた確かであると見ねばなるまい。

ここであらためて、本場面に引用された「あたら夜」という表現について考えてみたい。従来、入道のことばは当該歌の下句を喚起すること以上の役割は認められてこなかったが、光源氏が受け取った言葉の額面はあくまで、「あたら夜の」に尽きるのであり、「あたら夜」という言葉が元来珍しい表現であつたことを考慮しても、彼がそこから引歌以外のイメージをも看取した可能性は考えてみなければならぬだろう。

それというのも、「あたら夜」という歌ことばは、当該歌以降の例ではかなり多くが「月」とともに詠まれており、「月」との結びつきが極めて強い表現だからである。具体例は枚挙に暇がないが、次の歌などが挙げられよう。

① 春、月のあかき夜、いとどしくいりふして

ぬるほどのしばしもなげきやまるればあたらこよひの月をだにみず

〔和泉式部続集〕四四三

詞書には「月のあかき夜」とあり、他の例でも、八月十五夜や、九月十三夜など、明月をめぐる時節の詠が多い。このように、「あたら夜」が喚起する情景は、明るく輝く明月の夜のそれであり、入道の引歌も本場面の「はなやか」な「月」の情景の美しさや情趣を一層高めたに違いない。

ところで、こうした明月が印象的な情景は、本場面以外に須磨巻でも描かれていたことが想起される。

月のいとはなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所どころながめたまふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。

(二〇二頁)

八月十五夜、本場面同様「はなやかに」輝く明月を見て、都にいた頃の管絃の会を思い出すにつけても自らの不遇な現状に失意は深まるばかりである。と同時に、傍線部にあるように、京に残してきた恋人たちのことが想われ、彼女たちも同じ月を賞翫しているだろう、と光源氏は感慨にふける。

光源氏の感慨は、和歌に類型的な発想でもあつた。

② 月明かゝりける夜、女の許に遣はしける 源信明

恋しさは同じ心にあらずとも今夜の月を君見ざらめや

〔『拾遺集』恋三 七八七〕

③ 月を見て、田舎なる男を思出でて遣はしける 中宮内侍

今夜君いかなる里の月を見て宮に誰を思出づらむ

〔同右七九二〕

④ よひのおもひ

さやかに人も人はみるらんわがめには涙にくもるよひの月かげ

〔『和泉式部統集』一三〇〕

②の歌では、心は一方通行でも今宵の明月を愛でる心は同じである、という男の痛切な想いが詠まれ、③では、月を見て地方に下向した恋人を思い出し、あなたの方では都の誰を思い出しているのでしょうか、と相手の浮気心に釘を刺している。④でも、違う場所にいっても同じ月を観ているであろうことが詠まれている。以上のように、天空に輝く明月は、逢う事ができない恋人たちをつなぐ媒介だったのである。

本場面の入道の言葉は、月光が「さし出でたる」頃を見計らって送られていた。光源氏は明石の君との文通の折、格下の相手に毎日手紙を送るのは遠慮され、「つれづれなる夕暮」や「ものあはれなる曙」などにかこつけて、「をりをり人も同じ心に見知りぬべきほど」に手紙を送っていたという（二五〇頁）。男女をつなぐ明月が輝く本場面は恋の対話を交わすのに絶好の機会であり、須磨巻と同様の「はなやかにさし出で」た月を見た光源氏が、離れた所にいる恋の相手として明石の君を意識した可能性は高いと言えよう。入道は、そうした文通態度の光源氏に先んじて、「月」、とりわけ明月を強く印象付ける「あたら夜」という言葉を突きつけたのであった。それが光源氏の明石の君に対する恋の好奇心を高めたと見ていいだろう。

さらに、谷知子氏は、「あたら夜」という歌ことばについて、「この良夜を共に過ごしたい人が側におらず、一人で過ごさなければならぬ状態を詠んだものが多い」と説いている¹⁶。平安期を通じてその傾向は強いが、『源氏物語』前後までに限定すると、「良夜を共に過ごしたい人」の範疇は、特定の間柄に限定される。

⑤ （紀伊国作歌二首）

たまくしげあけまくをしきあたらよをころもでかれてひとりかもねむ

〔『万葉集』巻九 一六九七〕

⑥ (あゆ)

あたらのよをいともねなでとりがたきあゆとるとるといはの上にあて

〔古今六帖〕 一五二三

⑦ 女のもとに

たまくしげあけまくをしきあたらのよをいにもあはであかしつるかな

〔猿丸集〕 一二

⑧ いきたるにあはねば

あたらの月と花とをおなじくはあはれしれらん人にみせばや

〔信明集〕 九九

右の四首は『源氏物語』成立前後までの作と認定される例である。⑤は傍線部にあるように、明けるのがもったいない夜を、妻に腕枕もせずに独り寝をして明かさなければならぬ寂寥を詠んでおり、『古今六帖』では「ひとりね」題に配されている。⑥は鮎取りに従事する男の詠歌だが、傍線部からやはり恋人と過ごせない不満が読み取れよう。⑦は、上句が⑤と同じであり、異伝というべきだが、独り寝の侘しさがより直接的に表現されている。⑧は、『信明集』における当該歌である。『信明集』は他撰により、信明没年の西暦九七〇年から『拾遺集』成立までの間に成ったものとされている。¹⁷ここでは中務と思しき女性との贈答として載るが、答歌が「きみならで誰にか見せむ梅花色をも香をもしる人ぞしる」(春上三八・紀友則)であり、歌意の噛み合わないさから虚構の贈答と目されている。¹⁸『源氏物語』成立前後の一享受資料として見れば、男女の贈答に仮構されていることや詞書から、やはり⑤から⑦と同じく、当該歌にも恋人と逢えない寂寥を詠んだものという享受の仕方があったことになる。¹⁹ちなみに、前掲①の和泉式部の歌も、独り寝の侘しさを詠んだものとの解釈があることも付言しておく。²⁰

このように、「あたらの夜」を詠み込んだ歌でも時期が早いものからは、恋人と逢えない寂寥や、独り寝の侘しさのイメージが看取されるのである。したがって、「あたらの夜」を共に過ごす相手は、時代が下るにつれて友人などまでに範疇が広がるにせよ、『源氏物語』成立前後では妻や恋人にほぼ限定されると言って格別の問題はなからう。「あたらの夜」という歌ことばはそれ自体が、相手に会うことの出来ない思うに任せぬ恋の情趣を醸していたのである。

むろん、入道から「あたらの夜」という言葉を受け取った光源氏も、この言葉の持つ恋のイメージを読み取ったに違いない。そして、

彼が入道のメッセージをどのように受け止めたかは、次の一節から容易に想像がつく。

明石には、例の、秋は浜風の異なるに、独り寝もまめやかにものわびしうて、入道にもをりをり語らはせたまふ。源氏「とかく紛らはして、こち参らせよ」とのたまひて、渡りたまはむことをばあるまじう思したるを、
(二五三頁)

明石に秋が到来してからの光源氏は、自分から明石の君のもとへ出向くつもりはないという態度を堅持し続けた一方で、一際まさる独り寝の侘しさを抱えていたのである。つまり、「あたら夜」の持つイメージに符号する心のありようだったといえる。とすれば、光源氏は入道の言葉に自身の現状を重ね、より一層の寂寥や焦燥感に駆られたと考えてよからう。

以上のように、「あたら夜」を歌ことばとしてとらえた時、一際印象的な明月の夜の情趣を一層高めるものであったといえ、離れた場所にいる恋の相手を想わせて光源氏の明石の君に対する恋情を触発する効果が認められる。また、恋人と逢えない寂寥や独り寝の侘しさを連想させ、実際にそうした思うに任せぬ恋のただ中にいた光源氏を、明石の君との逢瀬へ駆り立てたのであった。そうしたイメージを有する「あたら夜」という歌ことばを初句に持つ当該歌を誘い文句に用いたのは、実に周到な狙いのもとの選択だったといえよう。季外れであるにもかかわらず、当該歌の初句が誘いの言葉として選ばれたことの背景には、「花」を明石の君の比喻として提示するという狙いや、明月の当夜の情景や光源氏的心情と緊密に結びつく「あたら夜」という歌ことばの有するイメージの存在があったのである。

三、「すきのさまや」の解釈

以上、入道の引歌に込められた意図を分析してきたが、冒頭に述べたように、この誘いの言葉が作中どのように評価されているかは、諸氏によって一致を見ていない感がある。光源氏自身は、入道の引歌を受け取り、「すきのさまや」と心に思っているが、この心内文は入道の引歌に対する光源氏の感想であるというのが一般的な解釈である。²¹「すき」という言葉は、主に色恋を好む心のありようを評する言葉であるが、ほかに和歌や音楽など、様々な風流事を好む性格について述べる時にも用いられる表現である。そして、「すき」という表現は文脈に応じて批判、称賛、茶化しなど様々な解釈が可能であり、この言葉をどのようにとらえるかは引歌の評価を判断す

るうえでも重要であつたといえよう。

山口博氏によれば、入道は〈ひがもの〉即ち変人であるため、引歌という洗練された文化的行為を行うにふさわしくない人物であるという。したがって、入道が引歌に及んでもそれは風流を気取った行為に過ぎず、そうした彼の言動に対する光源氏の批判の言葉が「すきのさまや」だったと解釈している。²²確かに、入道は作中一貫して社会の道理を逸脱する変人として造型されている。また、たとえば常夏巻で近江の君がしたためた引歌を乱用した手紙が、弘徽殿女御周辺で嘲笑の種になっていることなどを考慮すれば(③二四八―二五一頁)、貴族社会の枠から外れた人物を作品が貶めて描く方法として、引歌が効果的に利用されていた形跡は認められよう。

しかし、入道は文化や教養の面に則して言えば都の一流貴族に劣らぬ水準にあった。由緒ある音楽の技量や良好な筆跡は光源氏も知るところであるし、和歌の贈答や引歌をまじえたやりとりも本場面に至るまでに交していた。とすれば、本場面で入道が引歌をしたからといって、光源氏が彼を批判したり嘲笑ったりする理由にはなりえなかったに違いない。また、仮に光源氏が入道の引歌に批判的だったとすれば、何故わざわざ明石の君の居所に向向いたりしたのだろうか。繰り返しになるが、彼にとっては明石の君から進んで奉仕してくることが大前提であつた。いくら流浪の身とはいえ、土着した元国司の娘風情を光源氏が対等な恋愛の相手として扱うことはなかったのである。それでも、季節が秋になると、入道に頻りに仲介を求めるようになるが、そうした佻しさや焦燥を感じてもなお、自分から出向こうとは考えなかった(二五三頁)。そうまで堅持した態度は、〈ひがもの〉がよこした批判されるべき風流気取りの引歌によって動かされるようなものであつたろうか。入道の引歌が本場面で批判の対象として評されていると見るならば、光源氏がわざわざ明石の君のもとへ出向く理由はないといわざるをえまい。したがって、光源氏は入道の引歌を好意的に評価しており、彼の言葉に触発されたために最後まで譲れなかった一線を踏み越えたと考えるのが至当だろう。

かといって、「すきのさまや」を称賛にとらえるのも難がある。²³本場面では、「すきのさまやと思せど」と、文が逆接で続いており、この言葉を引歌に対する好意的な評ととらえると、下接する岡辺の宿にでかけていく光源氏の叙述と文脈が整合しない。この言葉が称賛であつたならば、「すきのさまやと思して」などと順接に続いていなければ不自然なのである。

そもそも、この言葉は本当に、入道に対する評言だったのだろうか。確かに、玉上琢彌氏が指摘するように、明石巻では入道が「す

き」「すきずきし」と評される例が多い。²⁴たとえば、初夏に行われた月夜の合奏の場面で、入道が『白氏文集』の「琵琶引」を話の枕にしつつ、娘の琴の腕前を語った際、語り手が彼の様子を「すきめたれば」と評している（二四三頁）。また、明石の君から光源氏への手紙を代筆する際にも、「いとかしこきは、田舎びてはべる袂につつまあまりぬるにや」と、手紙の言葉に『古今集』の「うれしきを何につまむ唐衣たもとゆたかに裁てといはましを」（雑上八六五）をふまえて文飾しているが、その手紙は光源氏に「げにもすきたるかな」と評されている（二四八―九頁）。両例とも、話の中心が明石の君である点が共通しており、入道に対する「すき」のことばは、娘の結婚のことに積極的になる姿勢や、詩歌の引用から窺える豊かな文芸趣味への評と見てよからう。とすれば、本場面のことも、逢瀬の誘い文句に引歌を用いる入道のありようを評したものと見るのは不自然ではない。

しかし、明石巻の「すき」「すきずきし」の表現には他にも注意すべきものがある。

入道
「……さるは、

ながむらん同じ雲居をながむるは思ひも同じ思ひなるらむ

となん見たまふる。いとすきずきしや」と聞こえたり。

（二四九頁）

右の引用は、先述した手紙代筆の場面であるが、入道は自分の、娘の結婚への執着を評して手紙を「すきずきしや」と結んでいる。同じ「すきずきしや」という表現は他にも、鬚黒大將が玉鬘に届いた光源氏からの手紙の返事を勝手に代筆したものや（真木柱巻③三九五―六頁）、紅梅大納言が勾宮に対して娘の中の君を売り込んだ手紙に認められる（紅梅巻⑤五三頁）。いずれも、自分のありさまを「すき」であると評し、詠嘆の「や」を用いて自省の念を表現している点が本場面と共通している。自己のありようを、詠嘆の「や」を用いて評する例はほかにもある。『狭衣物語』の主人公が、今姫君に対し、源氏の宮と同じ養女であるという境遇に心動かされてしまふ自身を、「あやしの心や」と評する例や（巻一 一一一頁）、源氏の宮を垣間見たことをきっかけに自身のあやしくな恋心を「あな心憂の身のさまや」と評した例がある（巻三 一三七頁）。また、『源氏物語』中でも、作中人物が自分を、好色めいたさまだ、と評する例は、若紫を引き取りに来た光源氏が自分を「すきずきしきさま」とした例などがある（若紫巻①二三七頁）。

とすれば、本場面の「すきのさまや」という言も、入道に対する評ではなく、光源氏が自身のありようを省みるものだった可能性は

考えられないだろうか。光源氏は、明石の君への想いを、入道の引歌によって揺さぶられたのであった。そうして、「あるまじ」きこととすら思っていた、田舎者の明石の君のもとを訪れるという物好きな行動に向かつてしまう自分自身を内省したことが、本場面の「すきのさまや」だったのではあるまいか。もし、そうだとすれば、好奇心と理性の間で揺れ動く光源氏自身の心情が看取されることになる。

思えば、この辺りの光源氏の行動には不合理に思われることが少なくない。たとえば、わざわざ²⁵、「御直衣奉りひきつくるひて」逢瀬のための入念な準備を整えているにも関わらず、「夜ふかして」出かけたと語られている。入道の誘いがあったのは月光が指し始めた頃だったというから、空が暗くなつてすぐのことであろう。にもかかわらず、あえて夜半になるまで待つて出発したのは、人目に着くのを嫌った行動に他ならない。また、続く記述にも、

御車は二なく作りたれど、ところせしとて、御馬にて出でたまふ。惟光などばかりをさぶらはせたまふ。

(二五五頁)

とあり、立派な車が仕立ててあるにもかかわらず馬でかけることや、供を惟光など限られた腹心しか連れなかったことなど、徹底して目立たぬよう腐心していることが見て取れる。本場面では、明石の君との逢瀬に心動かされながらも、堂々とは行動することができない光源氏の屈折したありようが描かれていたものと考えられる。

以上のように見れば、自身の行動を内省する一方で、入道の誘いに乗り岡辺へ向かつてしまふ光源氏を描写した一節として、逆接の文脈が続いていくことも説明がつく。本場面は、好奇心とは裏腹に自省の心情を吐露せざるをえない、光源氏の微妙な心情を語って見たと見ることも可能であると思われる。

四、交錯する思惑、動き出す宿世

本場面は、逢瀬への期待と、一方で冷静に我が身の物好きさを自省し、こそこそ人目を避ける消極性という二様の態度の間で揺れ動く、光源氏の微妙な心境を語っていたが、彼と明石の君の逢瀬がかくも微妙なバランスの上に遂げられたのは何故だろうか。そもそも、

長い膠着も、光源氏を焦らすために設けられたのだとしたら、少々長すぎるようにも思われる。本場面に至るまでの膠着状態が説明される時、専ら両者の身分差が重視される。²⁷ただし、明石の君と文通を始めるに際し、光源氏は、「なかなかかかるものの隈にぞ思ひの外なることも籠るべかめる」と期待している（二四八頁）。これは、所謂「中の品」の女に対する光源氏の興味を物語っているように、そうだとすると、最初から身分差があることは織り込み済みであり、「京のことおぼえてをかし」（二五〇頁）とまで思わしめた明石の君の美質をもつてすれば、光源氏をその気にさせるのにこれほど長い時間は不要であつたように思われる。身分差が二人の関係の進展上、大きな壁であつたことは論を待たないが、この長い膠着状態を招いた原因は他にもあつたのではあるまいか。改めて、本場面に至るまでの文脈を確認しよう。

都の人も、ただなるよりは、言ひしに違ふと思さむも心恥づかしう思さるれば、気色だちたまふことなし。（明石巻②二三七頁）

右の引用は、光源氏と明石の君が文通を開始する以前、入道の話聞いた光源氏が明石の君に興味を持ち始めた頃の彼の心内文である。「都の人」とは紫の上のことであるが、彼女は「いみじからむ道にも、おくれきこえずだにあらば」と須磨への同行を願い出ている（須磨巻②一六二頁）。光源氏は「思ふ人具するは例なきことなるを」と彼女を都に留めたのであつた。もし明石の君と関係を持てしまえば、まさに「言ひしに違ふ」と思われても仕方のないことであり、田舎の女とのゆきずりの逢瀬は当然遠慮された。明石の君に惹かれるその一方で、常に都に残してきた紫の上のことが頭にあつたのである。さらに、本場面の直後、明石の君のもとへ実際に出向く時もその姿勢は変わらなかった。

道のほども四方の浦々見たしたまひて、思ふどち見まほしき入江の月影にも、まづ恋しき人の御事を思ひ出で聞こえたまふに、やがて馬ひき過ぎて赴きぬべく思す。

源氏 秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲居をかけれ時のまも見ん

とうち独りごたれたまふ。

（二五五頁）

傍線部では、入江の月影を見るにつけても、紫の上のことばかりが脳裏に浮かび、そのまま明石の君の所など通り過ぎて逢いに行きたいとさえ考えている。そうした願望は直後の独詠歌の「雲居をかけれ時のまも見ん」の箇所にも濃厚に見て取れる。明石の君のもとへ

自分から出向くことを考えなかったのは、格下の相手には勿体無い待遇であることに加え、紫の上の愛情に対して申し訳が立たなかったからであつたろう。それゆえ彼は、まだ申し開きのしようがある、明石の君側からの奉仕を強硬に求めたのではあるまいか。

さらに、明石の君と文通を始めたあと、光源氏が紫の上を「忍びてや迎へたてまつりてまし」と思っていたことも考えると（二五一頁）、長い膠着は、光源氏を焦らすどころか逆にうんざりさせてしまいかねなかったに違いない。それでも彼女への興味が失われなかったのは何故であつたか。

須磨から明石に移った光源氏は、若紫巻で噂を耳にした明石の一家と（①二〇二―五頁）、実際に巡り合った奇縁に、「さるべき契りあるにやと思し」ている（二三七頁）。後に、入道にも、明石の君との間に「浅からぬ前の世の契り」があるのではと語っており（二四六頁）、光源氏が強く因縁を感じていたのは間違ひなからう。この宿世の予感、光源氏が明石の君との関係に匙を投げなかった理由の一端として小さくはない意味があつたのではないだろうか。さらに、落標巻で回想されるように、光源氏は「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」という予言を得ていた（二八五頁）。この予言自体は、右大臣方隆盛の時勢を憚り、強いて考えぬようにしていたとあるものの（二八六頁）、因縁を感じている旨が繰り返し語られるのは、当然、後にこの予言が語られる布石となつていよう。ただし、明石の君との逢瀬が直ちに運命の好転につながるかと問われれば、その確証はどこにもない。光源氏は彼女との宿世を強く感じてはいたものの、あくまで半信半疑の状態だったのである。そのため、根気よく文通は続けるものの、無理に関係を望むでもない、というどっちつかずな、煮え切らない態度をとりつづけることになつたのであつた。

また、明石の君も光源氏の誘いに一向に応じない頑な態度を取つたが、その態度が光源氏を惹きつけもした。文通を通して、光源氏は「やむごとなき際の人よりもいたう思ひあが」つた気位の高さを明石の君に看取したのであつたが（二五一頁）、彼女自身の真情は異なつていた。

……ただこの浦におはせんほど、かかる御文ばかりを聞こえかはさむこそおろかならね、（中略）かくまで世にあるものと思したづぬるなどこそ、かかる海人の中に朽ちぬる身にあまることなれ、など思ふに、いよいよ恥づかしうて、つゆもけ近きことは思ひよらず。

（明石巻②二五三―四頁）

右の引用は、光源氏への想いを吐露した明石の君の心内文である。彼女は傍線部のように、自らを「海人の中に朽ちぬる身」と規定し、そうした自分には光源氏と逢うどころか文通できるだけでも、また、「世にあるもの」と存在を認識されただけでも身に余る幸福である、と考えていた。したがって、「け近きこと」など考えるはずもない、という「思ひあが」どころか卑屈ですらある、光源氏の印象とは正反対の真情を抱えていたのである。²⁸

ただし、光源氏が一方的に誤解をしていたとも言えまい。述べてきたように、光源氏は目下興味の対象であった「中の品の女」として彼女を見ていたわけだし、浅からぬ宿世を感じてもいたわけである。光源氏側の実情を彼女が把握出来ていたならば、このような後ろ向きに過ぎる態度は取っていなかった可能性もある。いわば、明石の君も光源氏の想いを誤解していたのである。

また、「ひとり寝は君も知りぬやつれづれと思ひあかしのうらさびしさを」と（明石巻②二四七頁）、明石の君が独り寝のつれづれをかこつような詠み振りの歌を入道から詠み掛けられていたのであるから、光源氏が明石の君の頑なな態度を恋の駆け引きと解しても仕方あるまい。二人の思惑の食い違いは、仲介役となった入道にも原因の一端があったのである。

入道の言動は明石の君の真情を埒外に置いた軽はずみなものであった。しかし、彼には誤解や膠着の余地を残さずに二人の仲をまとめることも可能ではなかったか。光源氏の要求に全面的に従うことも出来たはずである。目的達成のためなら貴族の地位をかなぐり捨てることさえ肯ずる入道が、娘可愛さのあまり行動力を鈍らせるとも考えづらい。彼の及び腰な態度の裏には、そうせざるをえないような深刻な問題が絡んでいたと思しい。

親たちは、こころの年ごろの祈りのかなふべきを思ひながら、ゆくりかに見せたてまつりて思し数まへざらん時、いかなる嘆きをかせんと思ひやるにゆゆしくて、めでたき人と聞こゆとも、つらういみじうもあるべきかな、目に見えぬ仏神を頼みたてまつりて、
人の御心をも宿世をも知らで、などうち返し思ひ乱れたり。

（二五四頁）

右の引用は、「親たち」を主語とするが、「年ごろの祈り」、「仏神を頼みたてまつりて」云々の箇所から、入道の心情が前面に出ているとみてよいだろう。入道は、二人を実際に逢わせるという段階に来て、明石の君が光源氏のお気に召さない可能性に思い至った。その場合、「いかなる嘆きをかせん」と危惧している。入道は自分の子孫が帝位に着くことを暗示する月日の夢を見たために（若菜上巻④

一一三―四頁）、全てを捨てて明石での雌伏に耐えていた。このことを考慮すれば、ここである「嘆き」は、単に娘が不憫であるとかいった次元の話では無論あるまい。入道は、背負うものの大きさゆえに、二人を逢わせることには慎重にならざるをえず、傍線部のように、光源氏の真意を読み切れずに持ち前の行動力を発揮できなかったのである。

光源氏が強く因縁を感じていることを預かり知らない入道は、目的達成のためのリスクを考え及び腰になる。また、入道が無上の瑞兆を感じたことを知る由もない光源氏は、宿世と貴公子の矜持、紫の上への愛情を天秤にかけ、煮え切らない態度を続けた。光源氏と入道の間にも、明石の君と光源氏の間のもそれはまた別種のすれ違いが起きており、それゆえ本場面の膠着状態は出来たのである。そうした微妙なバランスのもと続いていた膠着状態の末、入道がなんとか捻り出した解決策こそ、「あたら夜の」という引歌の誘いだっただけであるまいか。即ち、自らの言葉ではなく、古歌や歌ことばに思惑を託すことにより、光源氏自身の恋へ掛ける想いや主体性に訴えるという、回りくどい方法を取るしかなかったのではないかということである。そうした彼の言葉は「風流気取り」であつたはずがなく、また、絶賛されるような趣向がこらされているというよりも、入道が状況を打開するための苦肉の策であつたと位置づけるのが妥当であるように思われる。

おわりに

以上、光源氏と明石の君の進展しない関係を、入道の引歌の誘いが突き動かしていく本場面の意味を考察してきた。従来、別段問題視されてこなかったことだが、秋の夜である本場面に対して引かれた歌は春の歌であつた。このことは、会話文中で行われる引歌では異例といつてよかつたが、当該歌に詠まれたもう一つの景物である「花」を、明石の君の比喻としてほめめかすことで光源氏を誘いだす狙いがあつた。また、実際に引かれた「あたら夜」という歌ことばは、離れた場所にいる恋人たちをつなぐ媒介としての明月や、美しい夜の独り寝の侘しさなどが想起されるものであつた。こうした、光源氏を明石の君との逢瀬に駆り立てるための恋の挑発を幾重にも仕掛けるのに、当該歌がこれ以上なく適切だったのである。また、それを受け取つた光源氏の、「すきのさまや」という心内文は、

従来入道への批判、または称賛という正反対の二つの解釈が行われていた。しかし、どちらも文脈に適當しないと考えられるため、本稿ではむしろ光源氏の自省の弁であると読むのが穏当である可能性を提示した。そして、本場面に至るまでの膠着状態は、宿世を感じつつもそれを信じきれず、身分差の問題や紫の上への遠慮を抱える光源氏、後ろ向きな考えから光源氏を拒絶する明石の君、光源氏の曖昧な態度の裏にある真意を読み切れず及び腰になってしまいう入道、という三者の思惑の微妙な食い違いによって出来たものであった。入道の引歌は、この膠着状態を動かすために彼が考案した苦肉の策だった。入道は、自らの言葉で光源氏に語り掛けることはせず、「あたら夜の」という引歌に幾重にも誘いの意図を込めることにより、光源氏自らが明石の君のもとに向いて来るように仕向けたのであった。光源氏の「すきのさまや」という自省の弁は、種々の蟠りを抱えた末に、入道の引歌に揺さぶられて逢瀬に傾いた彼の微妙な心情を物語っていたのである。

本場面、そしてそこに至るまでの膠着状態の背景には、各登場人物の複雑な心の綾や、明石一族と光源氏の宿世が交錯するさまが展開されていた。今後の物語展開を大きく左右する緊張感にあふれた心理劇が繰り広げられていたのである。入道の引歌の誘いの言葉も、それ自体が優れているか否かということ以上に、こうした経緯を経て苦悩の末に捻り出されたものであることを重視せねばならない。本場面は、明石一族と光源氏の宿世の物語が動き出すうえで、極めて重要な意味を持つ一齣だったのである。

1 引用本文は、特に断りのない限り以下の通り。散文作品Ⅱ小学館「新編日本古典文学全集」 八代集Ⅱ岩波書店「新日本古典文学大系」 その他の和歌集Ⅱ「新編国歌大観」『源氏物語』の古注釈書Ⅱおうふう（桜楓社）「源氏物語古注集成」。適宜、巻名・冊数・頁数・部立・歌番号等の情報を補った。

2 引歌の認定は、基本的には鈴木日出男『源氏物語引歌総覧』（風間書房 平成二五年）によったが、私に判断したものもある。

3 阿部秋生「明石の君の結婚」『源氏物語研究序説』（東京大学出版会 昭和三四年）。また、竹内正彦「明石君の「けはひ」」『源氏物語発生史論』（新典社 平成一九年）は、明石の君のうちとけない態度が光源氏を惹きつけたとする。

4 小町谷照彦「光源氏の「すき」と「うた」」『源氏物語の歌ことば表現』（東京大学出版会 昭和五九年）は、本場面を和歌的表現が物語展開を牽引する例と説く。

5 山口博「源氏物語の引歌」〔『源氏物語講座⑦』有精堂 昭和四十六年〕、渡部泰明「〈一句引用〉と「姿」」〔『フェリス女学院大学紀要』第二四号 平成元年三月〕は、入道は引歌をするのにふさわしくない人物であるとし、木村正中「受領の女、明石の君」〔講座 源氏物語の世界③〕有斐閣 昭和五十六年〕は、「いささか度の過ぎた入道の風流ぶり」を光源氏がおかしく感じていたと説く。

6 玉上琢彌『源氏物語評釈③』（角川書店 昭和四〇年）は、光源氏の重い腰が上がったことを重視しており、鈴木氏の注2の書も当該引歌を高く評価している。

7 橋本不美男「折の形成と文芸」『王朝和歌史の研究』（笠間書院 昭和四七年）、久保木哲夫「折」と藝と晴」『折の文学』（笠間書院 平成一九年）
8 「五月の御精進のほど」（一九二頁）

9 本文は「平安朝歌合大成」所収の甲種によった。ちなみに『新千載集』には、冬の部立てによりみ人しらずとして入集している（五九九）。

10 たとえば、夕顔巻で夕顔が扇に書いて光源氏に贈った歌は、有名な「心あてにあらばやおらむ初霜のをきまどはせる白菊の花」〔古今集〕秋下二七七・凡河内躬恒）の歌の結構を借りつつ、季節の景物たる「初霜」「白菊」を眼前の別の景物に置き換えており、パロディといえよう（①一四〇頁）。

11 夙に、河添房江「源氏物語の引歌の位相」『源氏物語表現史』（翰林書房 平成一〇年）は、部立の「ずれ／ずらし」が源氏物語の引歌の真髄だと説いているが、本稿で述べたように会話文で行われる引歌においてはその限りではないといえよう。

12 たとえば、『林逸抄』は「明石岡の月を源氏に見せ奉らはやの心也」と説く。

13 西澤美仁氏「西行の能因歌享受」〔『国語と国文学』第五七巻第一号 昭和五五年十月〕

14 鈴木氏注2の書。玉上氏注6の書は、「花に娘をきかせたのかもしれない」と述べるにとどまる。

15 散文では、『源氏物語』に本例を含めて二例見えるのみで他には全く見られない。『源氏物語』では、八月十五夜近い晩に、浮舟と元婚の中将を引き合わせようとする小野の妹尼が「など、あたら夜を御覧じさしつる」（手習巻⑥三一九頁）と述べる例がある。ここにも当該歌が引歌として比定されるが、尼君の言葉は歌ことを会話に用いたにすぎず、当該歌の初句を引いたことが明らかである本場面とは区別すべきであろう。また、当該歌を引いていると言われる箇所は他に、鈴虫巻で冷泉院が光源氏を月見に誘う場面があるが（④三八四頁）、ここで引歌と指摘されているのは冷泉院の歌に続く「同じくは」という一般的な言葉である。『源氏物語』中には述語を示さず「同じくは」という言葉で文を中止する箇所が他にも認められるため（薄雲巻②

四四〇頁、東屋卷⑥三四頁など）、鈴虫巻の例も、「同じくは（ともに見む）」などの省略表現と見るのが妥当であろう。当該歌に特有な言葉を引用して
 いるわけでもないのに、引歌と見るには及ぶまい。

16 『歌ことば歌枕大辞典』（久保田淳氏、馬場あき子氏編 角川書店 平成十一年）

17 島田良二氏「信明集」『平安前期私家集の研究』（桜楓社 昭和四三年）

18 安藤太郎氏「信明集の伝本と構成」『平安時代私家集歌人の研究』（桜楓社 昭和五七年）

19 信頼性が高いとは言い難い資料ではあるが、御所本『中務集』に当該歌が中務から男への贈歌として載るのは近い享受態度であろう。

20 『和泉式部集全釈―統集篇―』（佐伯梅友氏ほか 笠間書院 昭和五二年）。前歌の詞書に「つきはみるべし、さをばゆかん、といひたる人」に詠んだ歌
 とあることと関連づければ、無理な読みではあるまい。

21 たとえば、比較的最近の『源氏物語注釈④』（山崎良幸ほか 風間書房 平成一五年）は、「「すきのさま」は入道の「すき」人ぶり」と注する。

22 注5の山口氏の論

23 注2の鈴木氏の書は、「これが恋への誘いの言葉として完璧すぎるほどであるだけに、源氏は「すきのさまや」とも反応している」と説く。

24 注6の書

25 松風巻で光源氏と再会した明石の君は、明石における光源氏の平素の様子を、「狩の御衣にやつれたまへりし」と回想している（②四〇九頁）。

26 畠山大二郎「源氏物語」の「ひきつくろふ」直衣姿『平安朝の文学と装束』（新典社 平成二八年）は、「明石の君の心を揺り動か」すための「特別な
 服装」とする。

27 注3の阿部氏の論

28 秋澤互「良清の噂」『源氏物語の准拠と諸相』（おうふう 平成一九年）は、若紫巻における良清の噂と明石の君の心情の内実の微妙な食い違いに起因す
 る登場人物たちの思惑の錯綜が明石巻の物語展開に認められると説いている。

29 注3の阿部氏の論

